

ISSN2433-2623

日本語文化の研究

VOLUME 2
May 2019

研究論文

マンガを活用した国語教育（3）－小学校の古文教育－	早野慎吾	1
多摩地区の日本語指導に関する研究－東大和市の状況について－	宮田好恵	11
非日本語話者の日本語理解度に関する研究 －教育に求められるメタ言語能力－	松井洋子	19
日本のマンホールカバーの社会文化的要素について	白浜公平	27

立川日本語・日本語教育研究所

マンガを活用した国語教育（3）

—小学校の古文教育—

早野慎吾

(都留文科大学)

The Study on Japanese Language Education Using Comics(3)

—Ancient Literature Education for Primary School Children—

Shingo HAYANO

1. はじめに

2011年度から小学校にも古典(古文・漢文)教育が導入された。本稿では、まず小学校教育において古文がどのように扱われているかを概説し、さらに教師として必要な古文知識を論じる。筆者は、早野・宮田・松井(2018a)、早野・宮田・松井(2018b)においてマンガを活用した国語教育について論じたが、本稿では、マンガを活用した小学校の古文教育を論じる。ここでは職業マンガ家の作品でなく教師が作成するマンガについて扱う。

マンガを取り入れた古文教育の研究に早野(2009)『「土佐日記」の研究と教育』がある。これは、2004年から2009年にかけて筆者が宮崎大学の教員養成系の学生に対して行った講義録で、受講した学生のレポートも掲載されている。本講義は、『影印本 土左日記（影印本シリーズ）』（萩谷朴氏編 新典社 1968）をテキストとして使用し、内容を解説した上で、「マンガ・イラスト・図などを使用してわかりやすく児童生徒に古文を解説する方法」をテーマに行っている。早野(2009)のまえがきには、レポートは「小学校の教員を目指す学生は小学生向き、中学校の教員を目指す学生には中学生向きの内容にするよう指示をした」と書かれており、受講生は、4コママンガやイラストを駆使して作品解説をしたレポートを提出している。幼少時からマンガを愛好している受講生が多く、優れた現代語訳や解説を付けたレポートもある。本研究では、早野(2009)掲載の学生レポートを紹介しながら論じる。

2. 学習指導要領

まず、小学校・中学校における学習指導要領における古典に関する記述を記載する。小学校学習指導要領（平成10年12月告示）の国語において古典の学習は、「第2 各学年の目標及び内容【第5学年及び第6学年】2 内容【言語事項】エ 文語調の文章に関する事項（ア）易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと。」とある。

中学校学習指導要領（平成10年12月告示）の国語では、次の記述がある。

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

（4）第2の各学年の内容の「C 読むこと」に関する指導については、次の事項に留

意すること。イ 古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めることにする。その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを生徒の発達段階に即して適宜用いるようにすること。なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにして、文語における言葉のきまりについては、細部にわたることなく、教材に即して必要な範囲の指導にとどめること。

古典教育は、高等学校から本格的に行われるため、小学校では「親しむ」、中学校では「関心を深める」「関心をもたせる」等のことが指導要領には書かれている。

3. 教材研究

ここでは、筆者の協力校である東京都東大和市立第十小学校が使用している『ひろがる言葉 小学国語』(教育出版)を中心に古典作品が教材としてどのように扱われているかをみてみる。



図1 『ひろがる言葉 小学国語』 5下 pp. 32-33

『ひろがる言葉 小学国語』では、古典として「漢文に親しむ」(5上)、「「古典」を楽しむ」(5下)、「春はあけぼの」(6上)、「言葉は時代とともに」(6下)が扱われている。タイトルからもわかる通り、古典に親しむことを目的としている。図1は、「「古典」を楽しむ」の冒頭部分であるが、この単元では、『竹取物語』『平家物語』『伊曾保物語』の一節を取り上げて、現代語訳と簡単な作品解説を行っている。現代仮名遣いと違う表記

(歴史的仮名遣い)は、ルビで現代仮名遣いを示している。

古典作品は、『ひろがる言葉 小学国語』で「文化」という共通テーマのもとに扱われており、教師用指導書(『ひろがる言葉 小学国語5下 解説・展開編』教育出版)では、「古典」を楽しむについて、「日本の古典の中には、さまざまな物語がある。ここには、小学5年生にも比較的親しみやすいと思われるものを、数点取り上げた。それらの原文の一部にふれながら、その時代を感じ取ったり、それぞれの時代の人々の生活や文化の一端にふれたりするような学習をとおして、今の自分たちの「物語」との関わりを考えさせて行きたい。」(p. 86)と解説されている。

冒頭の数行で「その時代を感じ取ったり、それぞれの時代の人々の生活や文化の一端にふれたりする」ことは不可能で、数行の古文で「今の自分たちの「物語」との関わりを考えさせ」ることは無理である。たった数行の原文で時代背景や文化を感じ取れるほど古典作品は簡単なものではない。教師は、そのことを念頭におく必要がある。

『ひろがる言葉 小学国語 6上』「春はあけぼの」では、原文とその現代語訳を対応させて解説している(図2)。「声に出して読み、自分の思いを書きましょう」というテーマが掲げられており、指導要領の「易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと」に合わせた内容になっている。ただし、現代語訳が付いているからと言っても、児童にとって古文は意味のわからないお経のようなもので、音読して親しめるかと言えば、それは困難である。むしろ古文は意味のわからないものという印象や先入観を児童に与えかねない。

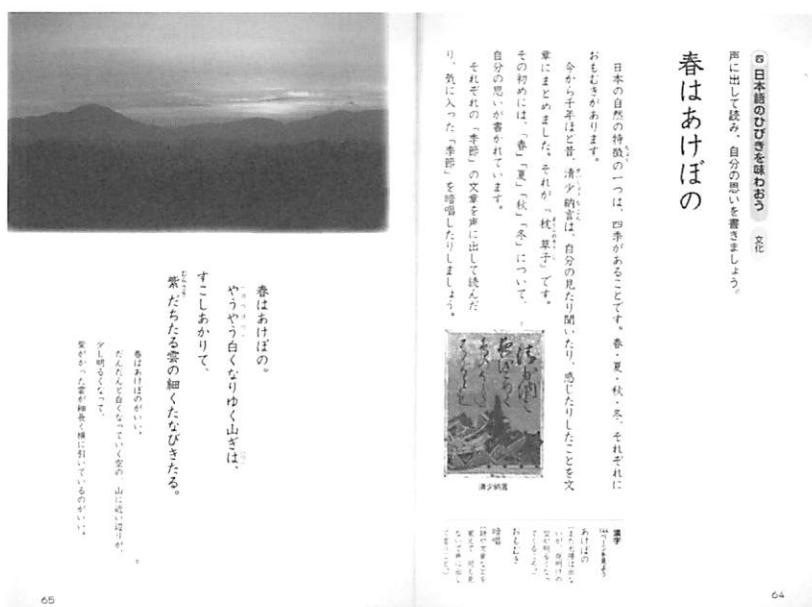


図2 『ひろがる言葉 小学国語』6上 pp. 64-65

筆者は、小学生には現代語訳だけを提示して、時代背景や文化を解説することが優先されるべきと考えている。古典作品に親しむだけなら、現代語訳だけで十分である。仮に、

原文を提示するのであれば、古文の現代語訳を提示して作品解説(作品成立期の文化や歴史的背景を含む)をした段階で、部分的に原文(この場合活字版)を提示するのが良いのではないかと考える。また、作品が成立した時代や文化を理解させるためには、社会科の授業とリンクさせると効果的である。文法解説や語彙の解説もなく原文を提示すれば、マイナス面も大きい。しかし、小学生に古文の文法解説するのも抵抗がある。

3. 現代語訳

図2の「春はあけぼの」の現代語訳は、「春はあけぼのがいい。」となっている。これは、「春はあけぼの」が「いとをかし」の省略とする解釈からくるものである。意味的には、「春はあけぼのがいい。」でもいいが、「～がいい(いとをかし)」を付けた現代語訳は作品的な価値を損ねる。「春はあけぼの」を例に、現代語訳の重要性を述べる。『枕草子』の冒頭部分は、各教科書教材で用いられており、以下の訳が付けられている。

『国語 五 銀河』(光村図書 : p. 34)「春は明け方がよい」

『小学生の国語六年』(三省堂:p. 67)「春は明け方(がよい)。」

『みんなと学ぶ小学校国語5年上』(学校図書 : p114)「春はなんといつてもあけぼのがいい。」

『新編 新しい国語 5』(東京書籍 : p. 190)「春はなんといつても明け方。」

橋本治(1987)『桃尻語訳 枕草子』では、「【春は曙】ただこれだけ。それがいいんだとも悪いんだともなんだとも、彼女は言っていない。」(p. 4)と記載されているが、その通りである。しかし、『新編 新しい国語 5』以外はの教科書教材は勝手に「～いい(よい)」を付けて訳している。

日本語学や日本語教育学では有名な「うなぎ文」(金田一 1955、興津 1978)と呼ばれる文型がある。料理を注文するとき、「キミは何にする」と聞かれ「ボクはウナギだ」と答えたという例を代表として「N₁はN₂。」の文型を「うなぎ文」という。「春はあけぼの」はまさに「N₁はN₂。」の文型であるが、「ボクはウナギだ」との違いは、質問もなしに唐突に「N₁はN₂。」の文型が用いられていることである。前触れもなしに提示された一文に、読者は一瞬「何のことか」と感じてしまう。そのため、現代語訳ではご親切に「～がいい」を付けて、ネタをばらしてしまう。

この冒頭部分は、「春はあけぼの」で文を止め、結論を述べないことで「春はあけぼのが何なのだろうか」と読者の想像を駆り立てる。結論を述べないことで読者は先の文章を読みたくなる。テレビ番組などで結論や結果を知りたいという視聴者の心理をあたり、結論や結果を先延ばしする手法がよく取られるが(コマーシャルを挿むこともある)、平安時代に書かれた隨筆で同じようなレトリックが用いられているのである。

『枕草子』の冒頭だけをみても、清少納言は読者に読みたくさせるテクニック(「読ませる」テクニック)を持っていたことがわかる。平安中期にこのようなレトリックを使った隨筆を書けたのであるから、清少納言の優れた文才がわかる。「春はあけぼのがいい。」と現代語訳を付けてしまうと、清少納言の優れたレトリックが失われ、平凡な文章となってしまう。橋本治(1987)では、「春って曙よ！」との訳を付けているが、非常に優れた現代

語訳といえる。言語学者の柴田武は橋本治(1987)を「こんなにこの本が人気を呼んだ秘密は、一つには、枕草子の文章をすなおに読んで、現代に繋げたところにあると思う。」(柴田 1995 : p. 152)と評しているが、筆者も同感である。意味を伝えるだけの現代語訳は、作品の価値を損なう可能性がある。小学生には、原文を提示するよりも、優れた訳文を提示して、その作品背景を解説する方がよい。その方が、古典作品に対する素地ができる。

4. 教師の知識

教師は、できれば学生時代に影印本に触れておく方が良い。早野(2009)で報告した講義(以後本講義)は、あえて影印本『影印本 土左日記(影印本シリーズ)』を用いているが、これは教師として必要な古文知識を身につけさせるためで、小学校に導入される古典教育に備えて行った講義である。

『影印本 土左日記(影印本シリーズ)』は、青鞜書屋本を写真複製したものであり、基本は仮名で書かれており漢字は促音・撥音等(「日記」「一文字」など)の特殊音節などに使われているだけで、初心者にも読み解しやすい。原著者である紀貫之の自筆本から直接書きした写本(為家筆本)が現存しており、青鞜書屋本は為家筆本に対し独自誤謬が4カ所、後人の補筆による転化が1カ所と判明している。つまり、この影印本は、為家筆本をほとんど複製本と言えるほど忠実に転写した青鞜書屋本を写真複製したものであり、作品成立時の言語状況を知るよい資料となる。

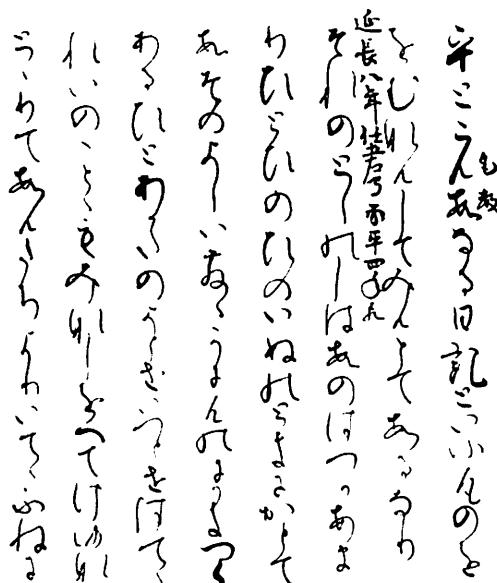


図3 『土佐日記』冒頭部 (『影印本 土左日記』p. 17 より)

図3では「日記」(1行目)だけが、漢字で表記されている。これは、促音(促音便)が仮名表記できなかつたためと考えられ、貫之は「日記」を「ニッキ」と発音していたことがわかる。活字本では「日記」を「にき」とルビを振っているものが多いが、影印本を使う

ことによって活字ではわからなかつた事実に気づくことがある。学校教師は、世に通用している解釈でも、すべて正しいわけではないことを認識していなければならない。

『土佐日記』は仮名文学と言っても変体仮名なので、慣れるまでは変体仮名集を用いて一字ごとに調べる事になり、漢字から仮名が成立した過程を学習することができる。6年生(国語科)では、各教科書教材で仮名の成立(日本語の文字)について解説する単元がある。図4は、『小学生の国語6年』(三省堂)の例であるが、この単元でも適切な内容を教えられる知識を身につけることができる。



无	和	良	也	末	波	奈	太	左	加	安
えん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	利	美	比	仁	知	之	幾	か	以	
たり	み	み	ひ	じ	ち	し	き	く	い	
留	由	武	不	奴	州	寸	久	宇		
る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	つ	く	う		
礼	女	部	称	天	世	計	衣			
れ	夷	ぢ	ち	て	せ	け	え			
遠	毛	保	乃	止	曾	己	於			
き	よ	ほ	の	す	ぞ	こ	お			
を	ろ	よ	も	ど	そ	こ				

図4 『小学生の国語6年』 p. 200

4. マンガを活用した古文教育



図5



図6

早野(2009)では、学生らがマンガ・イラストを活用した例が提示されており、そのいくつかを紹介する。すべて、児童生徒に向けて描かれたものである。

図5、図6は冒頭の「男もする日記(につき)」というものの女もしてみむとするなり。」の解説に使用されたイラストである。『土佐日記』冒頭部分は、学校教育では、伝聞推定の「なり(終止形接続)」と断定の「なり(用言の連体形接続)」が使われている例として有名な一文である。この一文には、さらに面白い現象が含まれている。「男もする」との表現である。「Aもする」といえば、A以外の存在がその行為をしていることが前提となる。△が「男」なら、「男」以外の存在がその行為をしていなくてはならない。筆者は、この箇所を早野(2011)において、以下のように解説した。

この一文(『土佐日記』の冒頭)を読んで、はたと違和感に気づく。「男もする」という表現。男もするということは、女がしていることが前提となる。したがってそこは「男の(男が)」としなければならない。さらに「女も」とあるので、男なのか女なのかはっきりしてくれと言いたくなる。作品中に男性的な漢文訓読体が多いのも気になる。現在はニューハーフ(和製英語)という概念がある。この作品はさしづめニューハーフの日記ということになるのであろうか。(p.39)

この内容を学生に説明すると、そこに関心を持った学生も多く、「おねえ的土佐日記」等のレポートが複数提出された。橋本治(1987)『桃尻語訳 枕草子』ではないが、女性を装った男を強調しており、非常に面白い現代語訳を受けた学生もいた。ここでは、「おねえ的土佐日記」と題したレポートの現代語訳(冒頭部)を紹介する。訳の正確さは抜きとして、非常に面白い。

男?も書くって聞いている日記って言うのを、女?の私もやろうと思って、書いたの~。
任期が終わる年の十二月二十一日の午後八時に出発う~! その旅の様子を紙に書いておくわよ~ん。(早野 2009:p255)

図7は、「土佐日記新聞」との題が付けられたレポートで、対象は小学校高学年と書かれている。作者(貫之)に時代を超えてインタビューするという形式で作品解説を行っている。記載内容は対象を考慮する必要があるが、児童に古文の世界を親しませるにはよい方法のひとつであろう。

図8～図10は、4コママンガで解説したものである。図8は、『土佐日記』は紀貫之が女性に仮託して記したこと表現したマンガである。

図9と図10は、『土佐日記』12月22日の「二十二日に和泉の国までと、たひらかに願立つ。藤原のときざね、船路なれど馬のはなむけす。上中下酔ひあきて、いとあやしく、塩海のほとりにてあざれあへり。」の記述をマンガで表現したものである。「塩海のほとりにてあざりあへり」(図9)「船路なれど馬の鼻むけす」(図10)は、共に貫之の洒落である。「塩海のほとりにてあざりあへり」は「あざれる(餒:魚や肉が腐る)」と「あざる(戯:ふざける)」を掛けた洒落で、「あざれない(腐らない)はずの塩海のほとりで、あざれ合っている(ふざけあっている)のは、これ如何に」との内容である。「馬の鼻むけ」は、旅立つ人の前途の無事を祈って、旅行者と酒食をともにすることであるが、馬の鼻を進行方向に向けた習慣を語源とする。「海路なのに、馬のはなむけ(送別会)とは、これ如何に」

との内容である。現代の感覚では、馴熟落であり、いわゆるオヤジギャグ^{*1}である。このような例を使って、児童を古文の世界に誘う手法もある。



図 7



図 8



図 9



図 10

文章にマンガを挿入したレポートが多かったが、マンガだけで概説した学習マンガ^{*2}を提出してきた学生もいた。マンガの描き方がわからず苦労した学生もいた。このようなとき「まんがの方法」『ひろがる言葉 小学国語5下』(pp79-87)のような単元が活かされる。早野・宮田・松井(2018 b)で、「国語科だけでなく図画・工作や美術科の授業でもマンガを取り入れてみたらどうであろうか。実際にマンガを描いてみてもよい。」(p. 36)と論じ

たが、簡単なマンガの手法を教師が習得していれば、教育現場での指導方法が大きく広がると思われる。

教科書教材に関連したマンガを教科書教材の出版社が提供している例もある。図11は、光村図書が発行している広報誌『国語教育相談室』に掲載されたマンガである。これは、『国語 五 銀河』(光村図書: pp. 56-62)「古典の世界(一)」の授業を解説したマンガである。一コマ目に「古典の授業経験がない先生方代表」が登場する形で話が進む。つまり、教師向けのマンガである。筆者は、教師に対しての学習マンガは想定していないのであるが、古典・漢文に対しての基礎知識が少ない教師が少なからずいることの表れと解釈できる。



図11 『国語教育相談室』 No. 70(光村図書 2010) pp. 32-33

6. おわりに

本稿では、小学校における古典教育(古文教育)の状況と、教員として必要な知識、そしてマンガを活用した古文教材の例を提示した。

筆者は、小学校での古典教育は賛成だが、現在行われている原文を提示して音読させるという指導要領の内容には賛成できない。小学校では、現代語訳を通して古典作品の世界観や文化的背景を解説し、中学校の古典教育に繋げる方が良いであろう。これは外国文学にも言えることで、例えばJ. K. ローリング(1997)『ハリー・ポッターと賢者の石』(Harry Potter and the Philosopher's Stone) にしても、数行の原文を提示するよりも、日本語訳(たとえば松岡佑子訳(1999))をじっくり読む方が『ハリー・ポッター』の世界を知ることができる。数行の原文を音読したところで『ハリー・ポッター』の世界を味わうことは

できない。

数行の原文で「それらの原文の一部にふれながら、その時代を感じ取ったり、それぞれの時代の人々の生活や文化の一端にふれたりするような学習をとおして、今の自分たちの「物語」との関わりを考えさせて行きたい。」という指導書の内容が如何に無謀なことは、外国語教育を考えてみてもすぐにわかる。英語を学習する場合でも、英語で表現されている内容の基礎知識があると理解しやすいように、古典作品の背景等の基礎知識を解説しておくと、次の段階(中学校の古典教育)に繋ぎやすくなる。

図11のマンガからもわかるが、小学校の教師には、古典教育が行えるだけの古典知識がない人たちも少なからずおり、このような状況は、小学校に古典教育が導入されることが公表された時点で予測できたはずである。筆者は、古典教育に適応できる教員養成のための授業を影印本を用いて行ってきたが、小学校の教員を目指す人は、学生時代に影印本をある程度読めるだけの基礎知識を習得することが望まれる。教師が古典作品の知識を持ち、マンガを活用した教育法を開発できれば、古典作品に関心を持つ児童も多くなるであろう。

【注】

- 1 「オヤジギャグ」とは、活躍層以上の男性が使うと思われている、安直なギャグのことである。作品成立期に、このような洒落がどのように評価されていたのか知りたいところである。
- 2 早野・宮田・松井(2018)では、「学習マンガ」を「歴史や経済など、以前は文章で表現された内容がマンガでわかりやすく表現されたもの」(p. 30)と定義したが、当然、教育関係の内容を解説したマンガも学習マンガである。

【参考文献】

- 興津敬一郎(1978)『「ボクハ ウナギダ」の文法』くろしお出版
金田一春彦(1955)「日本語」『世界言語概説(下)』研究社
柴田武(1995)『日本語はおもしろい』岩波書店
萩谷朴編(1968)『影印本 土左日記』新典社
橋本治(1987)『桃尻語訳 枕草子(上)』河出書房新社
早野慎吾(2009)『「土佐日記」の研究と教育』自家版
早野慎吾(2011)『宮崎ことばの散歩道 ずんだれ編』みやざき文庫 75 鉱脈社
早野慎吾 宮田好恵 松井洋子(2018a)「マンガを活用した国語教育(1)－表現力育成の教材として－」『言論の研究と教育』1
早野慎吾 宮田好恵 松井洋子(2018b)「マンガを活用した国語教育(2)－授業実践から－」『都留文科大学紀要』88
青山由紀・吉永直子(2010)「古典って楽しい！1 竹取物語」『国語教育相談室』No. 7 光村図書
J. K. ローリング著 松岡佑子訳(1999)『ハリー・ポッターと賢者の石』静山社

(2018年2月27日原稿受理)

多摩地区の日本語指導に関する研究 －東大和市の状況について－

宮田好恵
(東京都東大和市立第十小学校)

A Research of Japanese Language Support in Tama Area(Tokyo Prefecture)
—The Situation of Higashiyamato City—

Yoshie MIYATA

1. はじめに

文部科学省の「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」によると、日本語指導が必要な児童生徒とは、「日本語で日常会話が十分にできない児童生徒及び、日常会話ができても、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じており、日本語指導が必要な児童生徒」とされている。そして、その判断に明確な指標はなく、現場の教員判断により日本語指導が必要かどうかを決定しているのが現状である。

教師は、教科教育や特別支援教育に関する知識はあるが、大学等で日本語教育や日本語指導を学んだ人はほとんどいない。学校現場では、本来、組織的・体系的な体制を必要とする日本語支援が行われず、学級担任に丸投げされている現状が全国的に観察できる。

筆者は、外国人児童生徒を中心とした年少者の日本語支援に関する研究を行ってきたが（早野・宮田 2011、宮田・松井・早野 2010 他）、本稿では、日本語支援の立場から東大和市の小学校の状況を報告し、必要とされる対応について論じる。

2. 東大和市の状況

松井（2008）では、日本語指導の対応について外国人児童生徒（JSL）の数に応じた取り組みが紹介されている。JSL の多い学校では日本語教室において効率的に日本語指導が行われるが、日本語教室が行われている学校は、東大和市においては 1 校もない（小学校 10 校、中学校 5 校）。東大和市では、日本語指導が必要な児童生徒には、市が委託している民間の派遣通訳か東大和市に登録しているボランティアが対応しているのが現状である。日本語教育は専門性の高い分野であり、小学校の日本語指導においても、日本語教育の知識があり訓練を受けた人材が対応すべきであるが（松井・早野 2006）、日本語指導が盛んな地域（茨城県つくば市・栃木県真岡市等）においても、ほとんどの場合、日本語教育の知識がない人が対応している（早野・松井・宮田 2010）。栃木県真岡市では、マニュアル等を作成して対応しているが（佐藤・早野 2007）、東大和市では、マニュアルすらない。東大和市のボランティアで日本語教育の知識がある人はほとんどいないのであるから、マニュアルで対策する必要が

ある。さらに、そのボランティアも中学校に派遣される場合が多く、小学校には派遣されることはない。

3. 小学校の状況

東大和市にある、東大和第十小学校の状況を中心に紹介する。現在、本校に在校する外国籍をルーツとする児童は24名で、国籍別では両親とも中国5名、父親が中国2名、母親が中国4名、両親とも韓国2名、父親が韓国1名、母親がフィリピンが9名、母親がタイ1名の状況にある(2018年3月現在)。「外国にルーツを持つ子ども」と表現するのは、日本国籍ではあるが、日本語を母語としない話者も多いためである。筆者らは、言語教育の立場から第二言語として日本語を学ぶ子どもをJSL(Japanese as a Second Language)、日本生まれではあるが、JSLに近い状態で日本語を学ぶ年少者をFJB(Foreigners of Japanese Birth)として区別した(早野・宮田2011)。筆者らが行った日本語力調査から、FJBは、両親ともに日本人の日本語母語話者よりもJSLに近いことが明らかとなり、FJBという術語で概念化したのである(早野・田中・松井・宮田2009)。

松井(2008)では、以下の図で日本語支援の体制を児童数により分類している。この分類からすると、東大和市は「多人数型地域」であり、本小学校は多人数校I型の属する。多人数校I型の場合、日本語指導担当の加配がある場合が多く、教師(ボランティアではなく)による取り出し授業も行われていることが多い。しかし、東大和市で加配はない。つまり、JSLの規模としては多人数校I型であるが、市としての対応は多人数校II型になる。

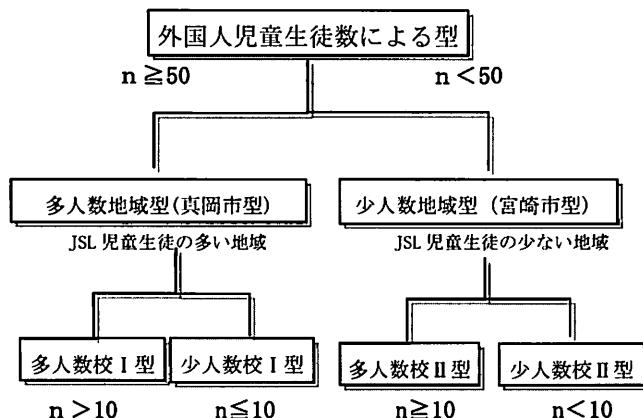


図1 外国人児童生徒数による型(松井 2006:p.2)

多摩地区のJSL年少者の対応では、欧米系と非欧米系で分けられる。本校に通学するのは非欧米系の児童がほとんどである。欧米系のJSL年少者も一定数いる。近くに米軍横田基地があるため、アメリカンスクールやインターナショナルスクールが多数あり、欧米系

児童の多くは、そちらに通う。希ではあるが、アメリカの学校に在籍して、長期の休みの際に短期間だけ公立学校に通う児童もいる。

東大和市の隣に位置する武蔵村山市では東大和市と状況が異なる。村山市立小中一貫校村山学園などは、日本語教室が2クラス設置されている。これには、武蔵村山市の事情がある。武蔵村山市には村山団地という大規模な都営団地があり、この団地には中国籍の住民も多く居住しているためである。近所には、中華料理や中華食材の専門店も複数あり、大きな中国人コミュニティーがある。

4. 対応の多様化

4.1. 対応が困難でないケース

筆者らの研究チーム(注1)では、JSL児童生徒に対する学校での対応について関東地方を中心に調査している。2019年2月に行った東京都府中市調査では、外国人児童生徒の多くが近くにある東京外国語大学の関係者であり、保護者が外国人でも日本語を話せる場合が多く、対応に困ることは少ないという情報を得ている。これは、2018年・2019年に行った茨城県つくば市調査でも同じ状況であった。つくば市では大学だけでなく研究機関も多く、その関係者の子弟が多く通学している。吾妻小学校では、イスラム教の児童も多く、ラマダン等の儀礼に関する対応もできている状況が確認できている。つくば市調査で対応した学校関係者はJSL児童(とその保護者)の優秀性を強調していたが、組織的・体系的支援体制が取られていた。

4.2. 対応が困難な難しいケース

大学や研究所の関係者であれば、外国人であっても日本語ができるだけでなく、学校教育に理解を示してくれることが多い。しかし、東大和市や武蔵村山市のJSL児童の保護者は日本語ができないだけでなく、日本の学校教育に馴染めない人も多い。東大和市や武蔵村山市のJSL児童らの状況は、栃木県真岡市の状況に近いが、真岡市は組織的・体系的支援体制を教育委員会が取っていた(佐藤・早野2007)。JSL児童生徒の対応で進歩的な真岡市と東大和市の大きな違いはそこにある。

東大和市では、中国やフィリピンからの在住者が多い。筆者が対応している例では、シングルマザーも少なくなく、その場合、日本語ができない場合が多い。この場合、もっとも問題になるのが連絡事項と各種手続きである。母親が外国人でも、父親が日本人である場合は、連絡事項もスムーズにでき、学校生活で支障をきたすケースは少ない。シングルマザーの場合は、学校に提出する書類が読めず、手続きなどが遅れる場合が多い。このような場合、早野・小田原他(2009)『外国人児童生徒のための「学校通知文作成ソフトウェア」』などを活用するとよい。早野・小田原他(2009)は、日本語で通知文を作成すると、英語、中国語、ポルトガル語、インドネシア語の通知文が作成できるので便利であるが、代表的な学校行事の通知文しか対応していないところに欠点がある。早野・小田原他(2009)を使用し

ても、約 25%は通訳者に翻訳してもらう等が必要となっていた。筆者は 2108 年度から、ソースネクストのポケトークという AI 通訳機(図 2)を使用しました。ポケトークの活用で、通訳者に依頼することが非常に少なくなった。本機は文字表記も表示されるため、通知文にも活用できる。

低学年では、担任が中心となって本機や翻訳アプリなどを利用して連絡をとり、高学年では、日本語を習得した児童を通して、必要な書類等の提出を行う場合もある。外国人児童性の在籍する学校では、AI 通訳機を保持することを勧める。

母親がフィリピン人の母子家庭では、1 年生の入学時に市からの書類が全く理解できず、入学式直前まで連絡が取れなかつたという例もある。日本人の場合、その多くが保育園や幼稚園に通っており、その保育園や幼稚園から連絡が来るが、外国人児童の場合、保育園や幼稚園に通っていない場合も多く、学校側の把握が遅れるケースがある。ただ、中国人なら中国人、フィリピン人ならフィリピン人のコミュニティーがあり、そのコミュニティーに属している場合などは、そのコミュニティーを通して連絡できる場合もある。学校側が、外国人コミュニティーとのコミュニケーションを取っていると、問題を防げる場合もある。



図 2 ポケトーク

PTA 活動については、日本人役員の善意で、学校の PTA 活動も、暗黙の了解で免除されている場合もある。教員だけでなく、PTA においても外国人児童生徒への理解が広まっている。

4.3. 事例報告

【Aさんの例】：過去の事例を報告する。Aさんの出身は中国で、現地の小学校に通っていた。両親は、日本で生活し、店舗を経営している。児童は、母国で母方の祖父母に育てられ、両親の経済基盤が確立できたため、来日した。父親は、日本語は話せず、母は簡単な日常会話ができ、ひらがなが読めるレベルであった。

学校の対応としては、来日が 3 学期という時期もあり、予算の都合上派遣通訳を委託できず、ボランティアの通訳をお願いすることになったが、そのボランティアも週 1 回 2 時間しか来られない状況であった。通訳がない状況に不安を感じたのか、母親が授業に同席し、通訳や授業の補佐を行うことになった。校内や教育委員会に日本語指導に対応する教育体制や専門職員がいないだけでなく、そのときの予算状況により、児童への支援に差が出る場合がある。また、東京都教育委員会「日本語指導が必要な児童・生徒への指導」(全 4 頁：本稿末尾の資料参照)を渡し、派遣(有料)通訳に児童の日本語指導を丸投げしてしまうケースもある。筆者は、日本語教育の専門家ではあるが、学級担任(さらに学年主任)をしているために、日本語指導主体の関わりができるない状況にある。東大和市の JSL 児童数から判断すると、加配が必要と考えられる。

入学直後において、Aさんは、校内において母親とのみの会話であったが、休み時間など、他の児童らが「どこから来たの?」「何が好き?」「おにごっこをして遊ぼう」など、積極的に話しかけるという状況が観察できた。通訳をしていた母親が「おにごっこ」等の知らない内容があったため、その都度、担任に質問していた。Aさんは、日本語でのコミュニケーションはできないが、顔を膨らませてブーッと吹き出したり、変な顔を見せたりする仕草で、日本人児童とコミュニケーションを取ろうとしていた。

日本語ができないため、背中から押したり、腕を掴んで、捻ることで力比べをしたりすることがあり、その行動を嫌がったり、意地悪をされていると感じていた児童も少なからずいたが、これは中国人児童の遊びのサインとなっている行為であった。担任がそのことを説明すると、納得した児童もいたが、感覚的に受け入れられないような児童もいた。

授業では、当然のことだが国語が難しく、1対1でボランティアが指導する取り出し授業を勧めたが、拒否された。当時(現在も)、教室不足で対応する部屋がなく(児童数が校舎の許容数を超えていたため、視聴覚室や理科室等も常に使用されている状況)、保健室での取り出しを提案したのだが、保健室は病気の人が行く所だから嫌だというのが理由である。この場合でも、日本語指導の担当者と教室が用意されれば、システムチックな日本語指導ができたと思われる。使用している教材は、ほぼひらがなで書いてあるため、通常の授業を進める中でひらがなの練習を担任が行った。

母親が授業に同席していたので、担任はAさんと一緒にひらがなの発音や読み方練習してもらった。Aさんは、1ヶ月後に、ある程度は読めるようになったが、発音できるというだけで、意味の理解まではできていなかつたと担任は報告している。

算数の授業では、計算式のみなら解答できるが、日本語で書かれた文章問題はすべて母親が対応していたが、2週間ほど経つと、「母親が教えてくれる、やってくれる」という自主性が失われた状態になり、すべての教科の学習態度に反映するようになった。

Aさんがこのようなったのは、教育体制に問題があるように思える。担任は30名以上の児童に授業を行いながら、Aさんに多くの時間を使うことは現実的にできない。また、Aさんがいる学級は、介助員の支援が必要な児童1名、通級に通っている児童1名、個別に声かけなどの支援が必要な児童が複数いる状況にあり、Aさんがいなくとも対応が難しい状況であった。組織や体制で対処していくべき問題を、担任個人が対応していかなくてはならない状況が、学校教育の大きな問題点と言える。

5. コミック教材の活用

筆者らの研究チームは、日本語学習者のためのコミック教材^(注2)の開発研究を行っている。これは、コミック作品の日本語表記を初級日本語に変換するという試みである。早野氏は荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』(集英社)、宮川サトシ原作『宇宙戦艦ティラミス』(新潮社)等の教材コミックを作成している。マンガの内容は、小学校高学年から成人向きである。日本語指導を5~6ヶ月受けている高学年児童に教材コミックを与えたところ、

その担任から非常に効果的であったと報告を受けている。日本語を学ぶ外国人留学生にも教材コミックは非常に好評であった。Aさんのようなケースは、低学年向けのコミック教材を与えて家庭で基礎日本語を学習してもらうのも一つの方法である。

現在、著作権の問題で、個人的な日本語指導や日本語教育でしか使用できない教材コミックであるが、東大和市のような状況を改善させるアイテムになるのではないかと期待する。

【注】

1. 早野慎吾(都留文科大学教授)を中心とする研究チーム(計16名)。学校教育での日本語指導研究を行っている。日本語指導の実態を、学校現場を訪れて調査している。現在、日本語教育研究所を拠点として、関東地方を中心に、全国的な調査を行っている。
2. 教材コミックとは、コミック作品のセリフ等の日本語表記を初級日本語や中級日本語に変換したものである。日本語学習者は日本語の教材として活用するが、日本人が読んでもキャラクターことば遣いのギャップがあって面白い。図3は『ジョジョの奇妙な冒険』(集英社)の1シーンを教材コミック化したもので、図4は原作である。J.P.ポルナレフがイギー(犬)の状況に不満を言うのであるが、ポルナレフのキャラクターことば遣いがずれており、『ジョジョの奇妙な冒険』ファンである筆者は非常に面白く感じた。

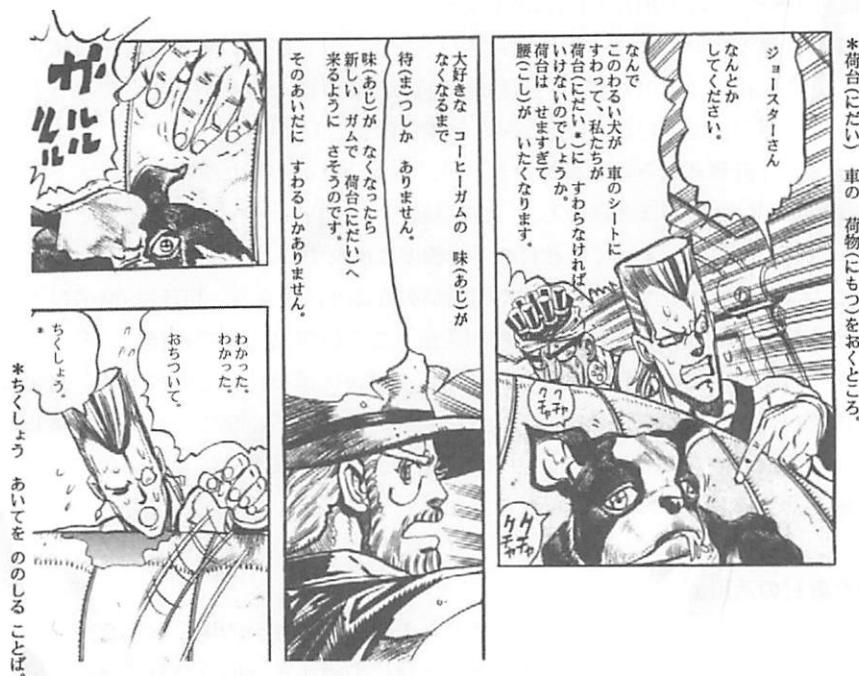


図3 コミック教材例 (早野作成版)



図4 荒木飛呂彦(2002)『ジョジョの奇妙な冒險』12:p.209 集英社文庫

【参考文献】

- 青山亭監修 早野慎吾編「学校通知文作成ソフトウェア(インドネシア語版)」『外国人児童生徒への日本語支援研究』立川日本語・日本語教育研究所
- 井上佳代 早野慎吾 (2006) 「外国人児童生徒に対する教育支援の研究—宮崎地区の調査から」『宮崎大学教育文化学部紀要(人文科学)』(14)
- 佐藤和之 早野慎吾 (2007) 「マイノリティ言語話者への教育支援—JSL 児童生徒多人数地域での取り組みー」『宮崎大学教育文化学部紀要(人文科学)』(17)
- 早野慎吾 宮田好恵(2011) 「年少者の言語能力と学力の関係—社会科教科書を用いた語彙調査からー」『Ars Linguistica』(18)
- 早野慎吾 松井洋子 宮田好恵(2010) 「外国人児童の語彙理解に関する研究—社会科教科書を用いた語彙調査からー」『Ars Linguistica』(17)
- 早野慎吾 小田原恵美子他(2009) 「学校通知文作成ソフトウェア(中国語版)について」『宮崎大学教育文化学部紀要(人文科学)』(21)
- 早野慎吾 小田原恵美子他(2009) 「学校通知文作成ソフトウェア(英語版)について」『宮崎大学教育文化学部紀要(人文科学)』(21)
- 早野慎吾 小田原恵美子他(2009) 「学校通知文作成ソフトウェア(ポルトガル語版)について」『宮崎大学教育文化学部紀要(人文科学)』(20)
- 早野慎吾 田中砂利子 松井洋子 宮田好恵(2009) 「外国人児童生徒の文章理解度について」

- ことばの意味が「わかる」ということ』『日本語学会 2009 年度秋季大会要旨集』
 松井洋子(2008)「多言語化する学校教育に求められる役割」『地域文化研究』(2)
 松井洋子 早野慎吾(2006)「年少者に対する日本語支援に関する研究」『宮崎大学教育文化学部紀要(人文科学)』(15)
 宮田好恵 松井洋子 早野慎吾(2018)「年少者の言語能力と学力に関する研究—日本語力と話者意識および生活習慣の関係について—」『日本語文化の研究』(1)

【資料】

東京都教育委員会
平成 30 年 3 月

日本語指導が必要な児童・生徒への指導

平成 29 年度の東京都公立学校における、日本語指導が必要な外国人児童・生徒の状況等をまとめました。日本語指導が必要な外国人児童・生徒が、基本的な日常会話に加え、学習活動に必要な日本語を身に付け、充実した学校生活を送ることができるよう、本資料を活用してください。

1 日本語指導が必要な外国人児童・生徒の状況

日本語指導が必要な児童・生徒とは

「日本語で日常会話が十分にできない児童・生徒」及び「日常会話ができるても、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じており、日本語指導が必要な児童・生徒」を指します。

(1) 東京都公立学校における日本語指導が必要な外国人児童・生徒数の 5 年間の推移 (単位:人)

校種	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
小学校	1,100	1,285	1,454	1,564	2,249
中学校	602	650	807	814	969
高等学校	349	366	430	526	736
中等教育学校	0	0	0	0	0
義務教育学校				16	11
特別支援学校	5	5	6	12	28
合計	2,056	2,306	2,697	2,932	3,993

※平成 26、28 年度は文部科学省調査、平成 25、27、29 年度は東京都調査

校種	人数
小学校	2,249
中学校	969
高等学校	736
中等教育学校	0
義務教育学校	11
特別支援学校	28
合計	3,993

平成 29 年度の日本語指導が必要な外国人児童・生徒数は、3,993 人で前年度調査から 1,061 人増加しています。

(2019 年 3 月 31 日改稿受理)

非日本語話者の日本語理解度に関する研究

—教育に求められるメタ言語能力—

松井洋子

(東京福祉大学)

A Research of understanding school material toward foreigners

—Metalinguistic ability required for education—

Yoko MATSUI

1. はじめに

筆者は、早野慎吾主宰の研究チーム(以後:本研究チーム)に参加して JSL(Japanese as a Second Language)児童生徒に対する日本語理解度の研究を行ってきた(GEI)。そこで、日本語能力の理解が、そのまま学力に反映している実態を明らかにしてきた。教科書に使用される日本語の難易度は、学年や教科によっても異なるが、先行研究において、高学年国語と高学年社会科の難易度が高いと指摘されている(工藤他 1999、白鳥 2000)。さらに、早野・松井・宮田(2010)において、日本特有の文化に関する単元で不理解語が多く、特に稻作文化に関する項目に不理解語葉が多いことを指摘した。

本研究チームでは、2011 年までは『新編新しい社会』(東京書籍 H18 年度用)を用いて調査をしてきたが、2012 年度からは、東京都多摩地区で多く採用されている『小学校社会』(教育出版 H27 年度用 以後:本教材)を用いて東京都多摩地区で調査を行ってきた。その結果、やはり稻作文化に関する単元に不理解語が多い事が確認できた。今回は、茨城県つくば市の外国人留学生や外国人児童らに本教材を用いて教科書理解度調査を行ったが、本稿では、その結果を報告する。

2. 調査概要

調査は、平成 30 年 2 月(1回)、12 月(2回)、平成 31 年 2 月(3回)の 3 度、茨城県つくば市で行われた。1 回目の調査では、つくば市立吾妻小学校、つくば市国際交流協会などを対象に行った。2 回目および 3 回目の調査は、JSL 児童及び外国人留学生に対する面接調査を行った。1 回目、2 回目の調査は早野慎吾が行い、3 回目の調査では、早野の他、松井、宮田好恵、ウイアスティニンシーが参加した。面接調査では、本教材(pp. 37-89)の不理解箇所を指摘してもらい、不理解の要因を確認した。これは、早野・松井(2008)と同じ手法である。

インフォーマントは中国語母語話者(漢字圏)とインドネシア語母語話者(非漢字圏)で、日本語学習歴は中国語話者平均 3.8 年、インドネシア語話者平均 2.96 年である。中国語話者は 21 人で、インドネシア語話者は 10 人の計 31 名である。中国語話者の中に一人、国籍はマレーシアだが、母語は中国語ということで中国語話者としている。

本調査では日本語学習歴3年未満の話者（中国語話者9人は0.11年～2.6年、インドネシア語話者は5人で、0.11年～2.9年）を初級、3年以上の話者（中国語話者12人は3年～15年、インドネシア語話者5人は4.6年～5年）を中上級話者と判定しており、実際の日本語能力による判定ではない。

3. 分析

3.1. 不理解語

早野・松井・宮田（2010）では、社会科教科書教材を用いた調査から「JSL児童の場合を含め、60%以上の児童が不理解の語彙は、ほぼ児童たちの日常生活では使用しない語彙である。日本人の場合「にっこうきすげ／日本三景／尾瀬ヶ原／厳島神社」のような地理（特定分野）に関係した専門性の強い語彙だけなのに対して、JSL児童の場合「平均／月別／地形／路面／表示／農業／周辺／快適な／伝統的な」などの一般的な文章で使用される語が多く含まれている。」（p.117）と記している。つまり、JSL児童の場合、音声言語は対応できているが、文章語に対応できていない実状が確認できた。

早野・松井・宮田（2010）では、日本人児童（日本語母語話者）と非日本語母語児童という分類で分析したが、今回は、対象の半数以上が外国人留学生であるため、漢字圏・非漢字圏の分類で分析を進める。

図1は、不得意な学習項目をアンケート形式で確認した結果である。文法や語彙項目など、留学生を対象とした表現を用いている（児童には聞き方を変えている）。実際に不理解語として認識されたものを選定して提示するが、具体的な項目においても図1とほぼ同じ内容となっていることがわかる。

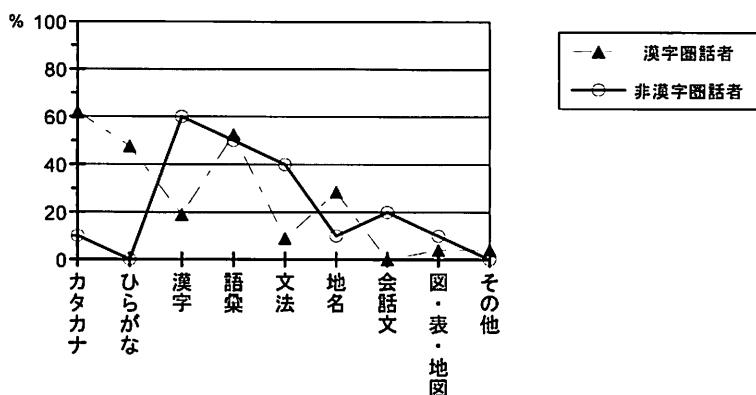


図1 不得意な学習項目

3.2. 漢字圏話者と非漢字圏話者の相違点

漢字圏話者は日本語学習歴にかかわらず、カタカナ、ひらがな表記の語句を苦手とする話者が多い。学習歴が長くなてもひらがな表記の不理解が改善できていないと言うことは、ひらがな表記は、表面的にはやさしく見えるが、読み手にとってやさしい表現と

は言えないものである。早野(2019b)では、「小学校5年生以上の教材では、常用漢字はすべて使用することを基本とするのがよいと考える。(中略) 常用漢字はすべて使用し、ルビ付き(未習)・ルビ無し(既習)で対応するのが学習には効果的である。」(p.9)と論じているが、これは、日本人児童およびJSL児童の日本語理解度調査の結果から言えることである。中国人学習者の母語と日本語との言語学的関係から日本語の漢字語彙は、表記、音韻、意味的に類推できることが、日本語学習を効果的している。しかし、表音文字であるカタカナ、ひらがなは漢字の知識の情報との関連づけ、意味を推察ことができないだけでなく、意味の切れ目をわかりづらくしてしまうのである。一方、非漢字圏話者はひらがな、カタカナは難しいと捉えてはいないのだが、読めたというだけで実際に意味を確認してもわからないことが多い(早野・田中・松井・宮田 2009)。仮名表記は、一見わかりやすく感じるが、実際は漢字表記以上に意味を理解しにくいことが明らかとなっている。非漢字圏話者には、漢字にふりがなを付けることが、最善の方法と言える。そして、今回の調査から以下のことが言える。

漢字圏話者

(易) 漢字語彙 < 漢字仮名交じり語彙 < 平仮名語彙 (難)

非漢字圏話者

(易) 平仮名語彙 < 漢字仮名交じり語彙 < 漢字語彙 (難)

4. 不理解項目

以下、要因ごとに不理解であった項目を例示する。

(1) 漢字圏話者にとって、漢字表記だと理解できる仮名表記

さかん	→	盛ん	くふう	→	工夫
さまたげたり	→	妨げたり	おとずれます	→	訪れます
こおらない	→	氷らない	せぼね	→	背骨
ふさづくり	→	房作り	ふくんだ	→	含んだ
なやまされる	→	悩まされる	ほしたさけ	→	干した鮭

(2) 漢字圏話者にとって読み方が理解できないもの

屋根／山脈／通行人／流れこむ／排出される／離れた／築いて／取り組み／
村中／必要なだけ／用いられた／支えています／給食便り／品物／田と畑／
整えて／水田／稻かり／農家／養蚕／国土／元通り

(3) ひらがな連続で意味を理解できないもの(_____ 下線部分が不理解)

1) まだいやひらめ	→	まだいやひらめ	まだ／いやひらめ
2) あとつぎがいない	→	あと <u>つぎがい</u> ない	あと／ <u>つぎがい</u> ない
		あと <u>つぎがい</u> ない	あとつ／ぎがいない
3) どこでつくられた	→	ど <u>こで</u> つくられた	ど <u>こ</u> ／でつくられた
4) ほたてやかに	→	ほ <u>たて</u> やかに	ほたてやか／に
5) やわらげてくれます	→	や <u>わらげ</u> てくれます	やわらげてく／れます

(4) 文法的に難しいもの

1. 助動詞

I 漢字圏・初級話者: とざされる／なやまされる／排出される／進められています／つくられました／用いられた／利用されました／つくられた米

II 漢字圏・中上級話者: なやまされる／たくわえられた／水あげされている／引き上げられた／かけられます

III 非漢字圏・初級話者: 排水される／とざされるために／結ばれてきました／進められています／解決されずに／残されています／いわれる伝統的な行事／ふくまれた水

IV 非漢字圏・中上級話者: 整備され／収穫されます／制限され／ふくまれています

2. 形式動詞（補助動詞）

I 漢字圏・初級話者: くらしている／～となっている／住んでおる／～になっていた／進められている／支えている／とどけている

II 漢字圏・中上級話者: ふいてくる／しづめていく／水を張つておく／やわらげてくれる／はねています／つめていく

III 非漢字圏・初級話者: あたえている／合っている／むすばれてきました／進められています／残されています／願っています／なっている／ぬりつぶしてみよう／くらしてきました／さまたげていました／努力してきました／育てています／努めてきた白根郷の人々／続けていきたい／くらしていました／理解していました／続けています／進められている／支えています／使っていた小屋／生きています／生えてきた雑草／よいでいます

IV 非漢字圏・中上級話者: 散らばっている／支えている／行っています

3. 連体修飾句、または連体修飾句を含んだ文全体が難しいもの

- ・「努めてきた白根郷の人々」「使っていた小屋」「生えてきた雑草」
- ・かつては樺太にくらしていた人たちが住んでおり
- ・大雨がふって、水かさが増すたびに水びたしになっていた地域があります。
- ・あとをつぐ人を育てたりする取り組みを国や北海道も支えています。
- ・わたしたちが安全で質のよい水産物を食べ続けるためには、水産物のとり方やとなる量などを考え、水産資源とその周りの自然環境を守りながら、進めていくことが大切です。

(5) 抽象的な基礎語

- | | | |
|--------|------------|-------------|
| ・「くふう」 | 漢字圏話者 (8人) | 非漢字圏話者 (9人) |
| ・「さかん」 | 漢字圏話者 (8人) | 非漢字圏話者 (5人) |

5. 不理解項目の分析

(1)から(3)は、仮名表記が不理解につながっている例である。ひらがな表記の連續による区切りの難しさは漢字圏話者に限らず、日本語学習者全体に言えることである。「ほたて(ホタテ)やかに(蟹)」では、「かに」の「に」を助詞の「に」と勘違いしている上級者も多かった。これは、副詞の「すぐに」「どこに」「いっしょに」など日常よく耳にする「～に」と同じものと類推したものである。「やわらげてくれます」については形式動詞の不理解さも加わり、不理解度が増していると考えられる。多くの初級日本語教材では「分かち書き」が採用されているが、JSL 児童生徒には、教科書教材において

も「分かち書き」が採用されると、理解しやすく、読みやすくなると考えられる。

(4)は、文法に関するものである。日本語教育において、助動詞として受け身の「れる」「られる」、希望の「たい」、比況の「ようだ」などは必ず取り上げられる文法項目の1つである。中でも受身表現は被動作主の側に視点置いた表現であることが特徴で、次の2点で用いられる。

- ①迷惑、あるいは被害を受けた心情を表す
 - ②歴史的事実や自然現象が原因で起こった事実、さらに社会で起こった事件、事故などについて客観的に述べる

②は新聞やテレビニュースなどに多く見られ、社会科教科書でも頻繁に使用されている。今回の調査でも漢字圏話者と非漢字圏話者の双方の話者が受身表現に不理解の指摘をしている。例えば、「閉ざされている」「残されている」は理解できないが、「閉ざしています」「残しています」との表記であればわかりやすいと答えた漢字圏話者がいた。「とざされる」「なやまされる」は①で、「排出される」「進められています」など、ほとんどが②の受身表現である。また「つくられた米」「とざされるために」「いわれる伝統的な行事」「ふくまれた水」などの受身表現が連体修飾句の中で使われており、JSLには理解が難しい。さらに、「進められています」「水あげられている」「結ばれてきました」「残されています」「ふくまれています」などは形式動詞（補助動詞）「～ている」や「～てくる」が続くため、テンス・アスペクトの表す時制や相などの意味も加わり、より不理解なものになる。

日常会話や日本語教育の現場においては「～ている」「～てある」「～ておく」「～てくる」「～てしまう」「～てみる」「～てもらう」「～てくれる」等の形式動詞が頻繁に使用されている。日本語学習者には、独立性を失くし、形式的な文法的意味を添加する形式動詞に混乱する話者も多い。今回行った面接調査においても学習者の多くが最初の動詞の意味だけで内容を理解したつもりになっていることがわかった。漢字圏、非漢字圏の中上級話者もそれぞれの違いを正確には捉えていなかった。形式動詞は用法が多岐にわたっていることや心理的な意味も加わり、さらには視点を変えて考えるものもある。そのため、一般に日本語学習者にとって習得が大変むずかしく、使用においても誤用が多く、使うことをあきらめ、使わないこともある。

今回の調査結果から、漢字圏初級話者の不理解となったもののほとんどが、アスペクト(相)における継続相や結果相を表すものであった。漢字圏中上級話者で不理解なものは「てくる」「~ていく」「~ておく」などのアスペクト(相)に関する項目であった。漢字圏・非漢字圏に関わらず不理解が目立つ用法は、基本的には①動作の進行、②結果の残存、③反復の意味を表し、動詞が表す動作や状態の時間的な局面や様相(例えば開始、終結、継続・反復)が表現されるものである。

- ①動作の進行 → はねている／育てています／よいでいます
②結果の残存 → 合っている／残されています／散らばっています
③反復 → くらしている／支えています／生きています

これらのアスペクトに関しては、特に理解が難しく、上級話者も①から③の動作の詳細な時間的・空間的・状況的・意味的な複数の側面を区別するのに苦労する。利益授受に関する「～てくれる」などは、より習得が困難のようである。ある程度理解している

ると思われる中上級話者の指摘からも形式動詞の習得困難さがわかる。

非漢字圏初級話者の不理解では「～ている」「～てくる」「続けていきたい」「～してみよう」などが多かった。「続けていきたい」は、「～ていく」に「～たい」と希望を意味する助動詞が加わっている。「してみよう」は「ためしに～する」の意味に助動詞の「う・よう」の意思・推量の意味が加わっている。また「努めてきた白根郷の人々」「使っていた小屋」「生えてきた雑草」など、形式動詞が使われているものがさらに連体修飾句となっているものも不理解が目立った。非漢字圏話者にとっては、これらの形式動詞に加え、漢字の不理解、助動詞、テンス・アスペクトも加わり、更に不理解さが増していると考えられる。漢字仮名交じり文には、ここまで取り上げてきた文法的な多くの問題が含まれており、読み進めることはできない。

教科書教材で非常によく使われる「くふう」「さかん」であるが、これらは抽象的であるがゆえに理解が難しい語彙である。漢字圏話者はこれが「くふう」「さかん」と平仮名表記であることも難しさの要因であるが、「工夫」「盛ん」という漢字表記であれば理解しやすいかもしない。しかし、中国語で「工夫」は「設法」で漢字表記でもわかりづらい。これらの単語(言葉)は文脈の中にあり、前後の「くふうや努力をして…」から推察できず、文全体が理解できていない。特に非漢字圏話者にとっては、ひらがな表記で読めるが意味が分からず、母語訳がなければ、全く読み進めることはできない。文の前後でその意味を推察することはできないのである。したがって、漢字表記やルビ、言葉の解説、母語訳なども必要である。

教科書教材には各ページに地名や地図、図や写真などが多く記載されている。今回の教科書教材の理解度調査では非漢字圏話者はそれらが有効であるとの反応が多く、難しいものとして捉えられていない。各国共通の図や写真は被話者にとっては理解しやすい。『新編新しい社会』(東京書籍H18年度用)を用いた調査では、非常に不理解が多かったのであるが、本教材では理解を助けるとの反応が多かった。まさに教科書教材には図や表に「くふう」が必要である。

6. 指導者に求められるメタ言語能力

ここまで実地調査をもとに、日本語学習者の教科書理解度を分析したうえで、その改善点について考察してきた。その結果、漢字圏話者も非漢字圏話者も日本語を読む際に、語彙の意味に大きく依存している傾向が見られ、語彙に含まれる統語的な情報や文の前後関係から文の構造を推察するまでには至っていないことがわかった。

早野(2019b)では、これまでの調査結果を踏まえ、次の5つの方針で、本教材の編集を行い、JSL児童用教材を作成した(JSL用教材)。

- (1) 文章を分かち書きで表記する
- (2) 難しい表現はやさしい日本語に変換する
- (3) 難易度の高い語彙は解説を加える
- (4) 漢字を用いてルビをふる
- (5) 語句の途中で改行しない

4名のJSL児童を対象とした予備調査ではあるが、上記で指摘した不理解がJSL用教材では、ほぼ解消されていた。非常にシンプルな編集(表記変換)ではあるが効果的である。

可能なら、全教科書教材にJSL用教材を作成すると外国人児童生徒の学習支援には非常に有効であるが、現時点では、本教材をモデルとして提示することしかできない。

シンプルな編集ではあるが、実は(2)と(3)が難しい。日本語学習者がどのような語彙が理解できず、どのような構文を苦手としているかなどは、一般的な教師が理解するのは難しい部分もあるが、それを理解することで指導力を大いに伸ばすことが期待できる。

(1)の分かち書きは、ひらがな表記の連続による難しさを解消する。(2)に関しては、教科書教材の表現をやさしくする方法を教員に聞くと、漢字をひらがな変換することと、話すことばに換えると答える場合が多い。これは、正しい場合もあるが、既に述べたとおり、間違っている場合も多い。(3)は、その表現を覚えて欲しいときに有効になる。やさしい表現に変換するか、解説を加えるかのどちらを選択するかは、その場で覚えた方がよいか否かがポイントとなる。(4)は、漢字圏、非漢字圏にかかわらず必要なことである。安易に漢字をひらがなに変換すると不理解を引き起こす原因になるため、ルビを振ることで対応した方がよい。

日本語教師に限らず、学校教育の教師も説明能力の向上が望まれる。学校教育ではあまり論じられる事のない概念にメタ言語(metalinguage)がある。メタ言語とは、高次言語と訳されることもあるが、「ある言語について言明するのに用いられる一段階異なる言語」(『精選版日本国語大辞典』)である。早野(2019b)には非常に多くの示唆が含まれており、そのひとつがメタ言語能力である^(注2)。JSL用教材の(2)と(3)が難しいと述べたが、(2)と(3)は、ある表現を他の表現で解説することであり、どちらもメタ言語機能を利用したものである。今回は、社会科の教科書教材を用いたが、これはすべての教科に言えることである。以前、算数の割り算でも「3で割る」ではなく、「3つに分ける」と解説すると理解できる児童が増えるとの本研究チームで話題になったことがある^(注3)。不理解者が多いと、学校教師は指導法を見直すのであるが、早野(2019b)でもわかるとおり、表現を換えて、ことばの解説を加えるだけで不理解を解消できる場合も多い。児童は、授業内容よりもことばの意味そのものが理解できていないことが多いのである。それは、108名の児童を対象に行った大規模な調査研究である早野・田中・松井・宮田他(2009)からも明らかである。日本語教師に限らず、学校教師も指導する側は、メタ言語能力が大いに求められる。

[注]

- 筆者は、早野先生が2004年に立ちあげた研究組織に2006年度より参加して、継続的にJSL児童生徒の支援研究を行っている。早野(2019a)「外国人児童生徒に関する日本語支援研究」にこれまでの活動が要約されている。
- 生越(2007)では、「メタ言語意識」は通常意識下にある言語に関する知識を取り出して対象化しようとする意識、あるいは気づきを意味し、「メタ言語能力」とはメタ言語意識を呼び起こす能力を指すとされており、両者を区別することなく用いるとしている。
- 本研究のチームには小学校の教員もあり、チームリーダーの早野先生が小学校の模擬授を行うことも多い(特に国語と算数)。そこで、早野先生の解説がわかりやすいという児童からの評価を受けるのであるが、早野先生は、わかりやすい表現に言い換えて解説すると不理解者が減ると説明されていた。つまりメタ言語機能を活かした解説を行ったこ

とが、わかりやすい授業の要因ともなりうるのである。

[参考文献]

- 生越秀子(2007)「メタ言語能力を育てる小学校国語教育についての一考察—「伝え合う力」育成を視座に—」『全国大学国語教育学会発表要旨集』112, 13-16
- 工藤真由美・木幡智美・玉井裕子(1999)「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査—教科書の語彙との比較調査から—」『国文学 解釈と鑑賞』64-1 至文堂
- 白鳥智美。玉井裕子他(2000)「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査—社会科教科書の語彙—」『2000 年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 早野慎吾(2019a)「外国人児童生徒に対する日本語支援研究」『別冊外国人児童生徒への日本語支援研究』pp. 2-11
- 早野慎吾(2019b)「JSL児童用教材の開発研究」『別冊外国人児童生徒への日本語支援研究』 pp12-24
- 早野慎吾 松井洋子 田中利砂子(2008)「外国人児童の教科書理解度に関する研究—社会科教科書を用いた語彙調査から—」『2008 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 早野慎吾 松井洋子他(2008)「多言語社会における教科教育—社会科教科書の文章理解に関する研究—」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』19 pp. 39-50
- 早野慎吾 田中利砂子 宮田好恵 松井洋子 川添桃 小田原恵美子 田村京子(2009)「外国人児童生徒の文章語理解について—ことばの意味が「わかる」ということ」日本語学会 2009 年度春季大会(『日本語の研究』5(4) pp. 103-104)
- 早野慎吾 松井洋子 宮田好恵(2010)「外国人児童の語彙理解に関する研究—社会科教科書を用いた語彙調査から—」Ars Linguistica 17 pp. 114-125
- 松井洋子(2008)「他言語社会化する学校教育に求められる役割—JSL 児童生徒数に対応した教育支援の研究—」地域文化研究 2 pp. 1-10
- 松井洋子(2010)「中国語母語話者による日本語彙の理解に関する研究—5 つのカテゴリ別語彙分類調査から—」『地域文化研究 3』pp. 1-9

付記：本研究は、日本教育公務員弘済会 H30 年度日教弘本部奨励金研究(代表早野慎吾)による成果であり、本研究で使用したデータは、早野先生主宰の JSL 児童生徒支援研究チームが採取したものである。なお、調査においては蔡東生先生(筑波大学)、遠藤知明先生(つくば市立吾妻学園小学校校長)にお世話になった。記して感謝申し上げる。

(2019 年 5 月 2 日改稿受理)

日本のマンホールカバーの社会文化的要素について

白浜 公平
(マンホールナイト実行委員会)

A Study on the Socio-Cultural Elements of Manhole Cover in Japan

Kohei SHIRAHAMA

要旨

マンホールカバーには地域性や歴史性があり、芸術的な側面も持っていて、愛好家も多く、近年ではブームとなっている。しかし、これらマンホールカバーの社会文化的な要素を主題とした学術的な研究はまだ存在しないようである。本稿では、マンホールカバーの社会文化的要素について、骨董的価値と芸術的価値の二つの価値に着目し、マンホールカバーのどのような点が人々を引き付けるのかを明らかにしている。

日本の古いマンホールカバーには第二次世界大戦前後に消滅した団体や組織の名残が残っていることも少なくなく、日本語の表記方法も変化してきており、興味を持つ愛好家が多い。さらに他の先進国に比べて下水道の普及率が低かった時代にデザインマンホールカバーが考案され、次第に日本全国に普及した。それは、ご当地デザインマンホールとも呼ばれており、これらを撮影することを目的に全国へ足を運ぶ愛好家も多い。中にはデザインマンホールカバーを目的に海外から来る愛好家も存在し、一つの観光資源にもなっている。

また本稿では、出版物やテレビ番組での扱いを纏め、現在のブームがどのように形成されていったのかを年代を追って説明している。さらに現在どのような文化活動や研究が進められているのか、その原動力は何であるのかを報告し、今後の学術的な研究へと繋げるための指針となることを目標とする。

1. はじめに

近年、マスメディアにマンホールカバー¹の話題が取り上げられる機会が増えている。これは、マンホールカバーの写真を撮ることや、その歴史を調べることを趣味とする人が増加し、それに伴う文化活動が盛んになってきていることを反映している。

マンホールカバーには、機能的要素と社会文化的要素とがある。機能的要素は、その構造や材質などを、インフラ設備の機能として耐久性や安全性などの土木技術的側面からみた要素であり、これらは主に土木工学の分野で扱われている。一方、社会文化的要素は、歴史性や地域性、芸術性などの側面からみた要素であり、本稿で論じるものである。

マンホールカバーは、基本的に地下構造物への立ち入りや維持管理を容易にするために設けられた開口部を覆うもので、道路や建築物に付随するものである。また、その多くは鋳鉄製である。路面に設置されるため、滑らないように

模様（凹凸）が施されることや、地下構造物の用途や管理者を記すために、文字や紋章が鋳出されることが多い。マンホールカバーの社会文化的要素とは、路上から見えるこれらの模様や文字、さらにはその形状に関する要素である。これまで、それらを手掛かりとしてその歴史性や地域性を調査することや、芸術性を評価することなどの様々な文化活動が行われており、これらの文化活動もマンホールカバーの社会文化的要素の一つである。

マンホールカバーは近代上水道・下水道の敷設とともに普及していったが、概ねヨーロッパでは19世紀、日本では20世紀前半がその創設期にあたる。この頃から既に模様や文字に地域性がみられる。日本においては東京型地紋（図1）や名古屋市型地紋（図2）といった、後に複数の地域で使用されることとなる模様が考案されている。文字においては、旧字体・新字体の別や、右書き・左書きの別、書体の違いなど、設置年代による違いを見ることもできる。

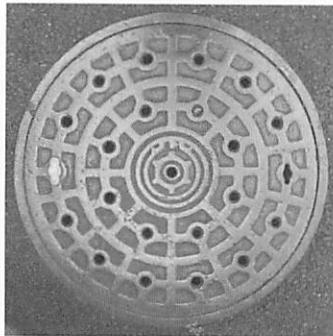


図1：東京型地紋のマンホール
カバー（東京都）

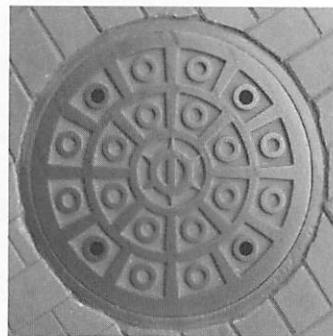


図2：名古屋市型地紋のマンホー
ルカバー（愛知県名古屋市）

日本では特に、1980年代より普及が広まつたご当地デザインのマンホールカバーに特色がみられる。これは自治体ごとに異なる絵柄をマンホールカバーの全面に施したもので、一部のものは彩色もされており、芸術性の高いものとなっている。元々は市民へ下水道の認知と理解を得て、その普及率を上げるために考案された施策であったが、近年では日本国内だけではなく海外からも、これら日本のマンホールカバーを見に来る観光客が存在し、観光資源にもなっている。

このような人気を背景に、マスコミに取り上げられる機会も増えているが、愛好家の視点からの報告が多く、学術的な方法論の確立までは至っていないため、マンホールカバーの社会文化的要素を主題とした学術論文は存在しないようである。本稿は、マンホールカバーの社会文化的要素の項目と方法論を提示することで、今後の研究の指針となることを目的としている。

2. マンホールカバーの骨董的価値と芸術的価値

マンホールカバーの社会文化的要素を論じる際によく扱われるのが、その骨

董的価値と芸術的価値の2項目である。それ以外にも着目すべき項目はあるが、ここでは代表的なこの2項目について説明をしておく。

2.1. マンホールカバーの骨董的価値

マンホールカバーは多くの場合、公共物であり、設置当時の管理者を示す文字や紋章が鋳出されていることが多い。例えば旧日本軍を示す紋章が入っているもの（図3）や、第二次世界大戦前後に消滅した自治体・企業の名前・紋章が鋳出されたもの（図4）も残っており、こういった骨董的な価値を持つマンホールカバーを探し歩くことを趣味とする人も多い。

古いマンホールカバーに鋳出された紋章は、現存していない団体のものであることも多く、その用途や管理者をつきとめるためには、膨大な調査を必要とする場合もある。正体のわからないままになっているものも相当数あり、これらの詳細な調査・研究を進める必要がある。

マンホールカバーは世界で最も古いものでも19世紀、日本においては20世紀初頭に設置されたもので、歴史的な文化財とはなりにくい。また、材質も鉄であり、高価なものではない。それゆえに、撤去される際に廃材として扱われてしまうことが多いが、現在は、その骨董的価値を認める人の数も増えており、これらの重要性を訴え、撤去後に保管されるよう働きかける活動も広がりを見せている²。

骨董的な価値を評価するだけではなく、複数の地域のマンホールカバーの模様や文字を分類することで、その歴史性や地域性の繋がりを探る試みもなされている。例えば、下水道のマンホールカバーの代表的な模様として、東京型地紋（図1）と名古屋型地紋（図2）とがあげられるが、この二つの模様は日本各地で採用されているため、調査・研究の対象となることが多い。この二つの地紋は日本を代表する地紋であるものの、その考案者が誰なのかということは現在のところ不明であり、その解明が研究課題の一つとなっている。林（1984）では、歴史的経緯から東京型地紋の考案と普及には中島銳治が、名古屋型地紋の考案と普及には茂庭忠次郎がそれぞれ大きな役割を果たしたのではないかとの推測としての記述があるため、確定事項として紹介される記事も多いが、あくまで推測であること認識する必要がある。このような、推測的記述が確定事項となっ

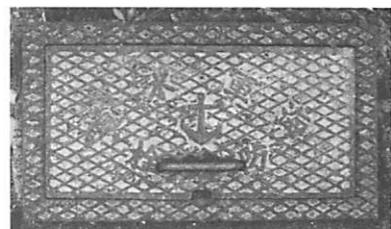


図3：大日本帝国海軍を示す錨の紋章が入った防火栓のカバー（広島県呉市）

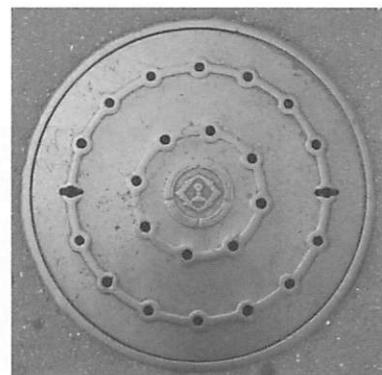


図4：昭和3年に開業し、昭和11年に廃止された光明電気鉄道の紋章が入ったマンホールカバー（静岡県磐田市）

てしまうのも、学術的裏付けの欠如を物語っている。学問としてのマンホールカバー学の確立が急がれる。

2.2. マンホールカバーの芸術的価値

芸術的価値を論じる際に対象となるのは、多くの場合デザインマンホールカバー（図5）である。デザインマンホールカバーとは、全面に絵柄を施した形狀のマンホールカバーのことで、絵柄それ自体が滑り止めの役割を果たしている。日本においては、自治体ごとに意匠の異なるデザインマンホールカバーが数多く設置されており、ご当地デザインマンホールとも呼ばれている。これは今のところ他の国には見られない特徴である。

デザインマンホールカバーが普及した背景には、1980年頃、日本では他の先進国に比べて下水道の普及が進んでいなかったという事情がある（水道産業新聞社編(1987)、月刊下水道編集委員会編(1992)他）。下水道の一般への認知を目的に、当時の建設省の主導により普及が進められた。近年では下水道の整備は全国でほぼ完了しているものの、維持・管理の必要性から、再び下水道の顔としてマンホールカバーが広報に利用される機会が増えており、それに伴ってその数も増えたため、各種メディアで取り扱われる機会も増えこととなった。

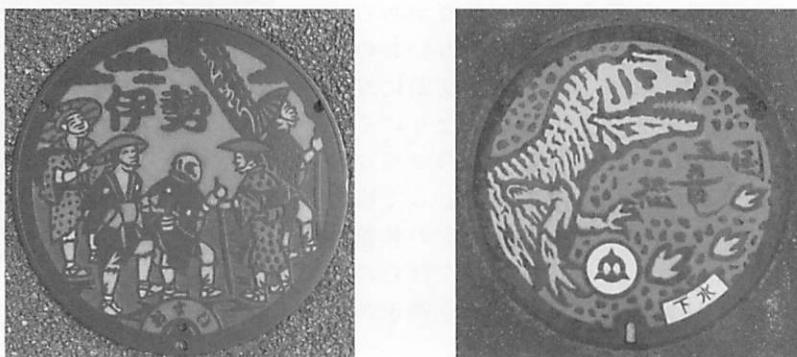


図5：代表的なデザインマンホールカバー。三重県伊勢市（左）と福井県勝山市（右）。その土地の特徴がマンホールカバーの全面に描かれている。

3. マンホールカバーのブームとその要因

マンホールカバーの写真を撮り集める愛好家や、さらに分類をしてその歴史を調査するなどの研究を進める愛好家は近年増加しており、一つのブームとなっている。電柱や道路といった他の社会インフラにもそれぞれ愛好家は存在するが、マンホールカバーの愛好家は数が多く、世代・性別も幅広い範囲に広がっている。

なぜマンホールカバーの愛好家が多いのか、その理由を探る議論も行われており、その中で「マンホールなどの鉄蓋の魅力は、歴史・地理・産業・土木・

インフラ・行政・芸術、などなど人文科学・自然科学・社会科学あらゆる分野に横断的な物件であるという間口の広さだと思う。様々な切り口から楽しめる。加えてコレクターのハートをも驚きしてしまう。」という指摘がSNS上でされたことがある³。この指摘は多くの賛同を得て、愛好家の間では共通の意見となっている。愛好家となるための間口の広さに加えて、歴史性や地域性がはつきりしており、蒐集欲を掻き立てることや、調査・分類の余地が大きく残されていることなどが、マンホールカバーがブームとなる要因であると思われる。

4. マンホールカバーに関する出版物とメディアでの扱い

国立情報学研究所の学術情報ナビゲータであるCiNii Articlesを検索した限りにおいて、マンホールカバーの社会文化的要素を対象とした学術論文はまだ存在しないようであるが、これを対象とした出版物やメディア報道・番組は数多く存在する。ここでは、それらのうち代表的なものを紹介する。

4.1. マンホールカバーをテーマとした出版物

出版物として確認できる最も古いものは、大東京社(1920、1921)である。当時の東京市内に設置されていたマンホールカバーをスケッチし、解説を書き加えた構成になっており、当時としては非常に斬新である。現在の路上観察学や風俗学、生活学の発想の元となった考現学は、今和次郎によって提唱されているが、その始まりは1923年(大正12年)の関東大震災後のバラックのスケッチであったとされている。それよりも前に路上観察学的性格の強いこれらの出版物が存在していたことは、考現学研究においても重要な研究材料であると思われる。

その後マンホールカバーに特化した書籍として、伊藤哲男(1967)があるが、これはマンホールカバーの構造強度に主眼を置いたもので、どちらかというと機能的要素について触れた内容となっている。しかし、マンホールカバーの模様についての記述もあり、社会文化的要素についても多少ながら触れている。

林(1984)は、その当時路面にあったマンホールカバーについて、その用途や由来などの詳細な調査結果が記されている。また現在では撤去・廃棄されてしまったマンホールカバーの写真も数多く掲載されており、貴重な資料にもなっている。他に、マンホールカバーに関連する新聞記事や、マンホールカバーが登場する小説や映画、漫画についても一通り触れられており、現在のマンホールカバーに関する社会文化的分析の原点ともいえる内容になっている。

下水道の普及を目的に、デザインマンホールカバーが多くの地方自治体で導入されるようになると、建設省下水道部監修のもと、水道産業新聞社よりデザインマンホールカバーをテーマとした書籍が相次いで出版された(水道産業新聞社編(1987、1989、1992)、水道産業新聞社編(1997)他)。掲載されているデザインマンホールカバーの数はそれぞれ、100種、200種、250種、2000種と増えており、この時期にデザインマンホールカバーの普及が急速に進んだことがうかがわれる。

その後、垣下(2005)を皮切りに、デザインマンホールカバーに特化した内容の書籍が一般向けに多く出版されるようになった。書籍の他にも、週刊誌や新聞で取り扱われる機会も増えている。一般紙だけではなく、技術専門誌においても特集される機会が増えている(G&U技術研究センター(2016)、月刊下水道編集委員会(2017))。

4.2. マンホールカバーのメディアでの扱い

マンホールカバーがテーマとして取り上げられた代表的な番組をあげておく。すべての番組を確認できたわけではないが、バラエティ番組では、朝日放送『探偵ナイトスクープ』の「マンホールでワッフル作り」(1998年5月放送)が最も早いものと筆者は認識している。大阪市のデザインマンホールカバーのうち、大阪城がデザインされたものを用い、大阪市下水道局とマンホールカバーの製造元である荒木製作所の協力の元、マンホールカバーで特大サイズのワッフルを作るという内容になっている。

その後は、垣下(2005)を執筆した直後に垣下が出演した、テレビ朝日『タモリ俱楽部』の「下を向いて歩こう！？ マンホール(人孔)鑑賞会」(2005年8月放送)と、NHK『熱中時間』の「マンホール」(2008年4月放送)がある。デザインマンホールカバーだけではなく、それ以前に普及していた古いタイプのマンホールカバーについても触れ、それらを眺める面白さを伝える内容になっている。

日本テレビ『ぶらり途中下車の旅』の「ニューシャトルの旅」(2008年8月放送)では、マンホールカバーの製造元である長島鋳物を訪ね、デザインマンホールカバーとマンホールトイレとが紹介された。マンホールトイレとは、阪神淡路大震災後に普及が広がった、マンホールの上に設置可能な仮設トイレのことである。

その後、マンホールカバーに関する文化活動が活発になるにつれて、各局のワイドショーの特集やニュース報道で取り上げられる機会が増加している。主要な番組としては、BS日テレ『中川翔子のマニア★まにある』(2014年6月放送)⁴、テレビ朝日『相葉マナブ』(2015年10月放送)、テレビ朝日『タモリ俱楽部』(2017年2月放送)⁵、静岡朝日テレビ『ピエール瀧のしょんないTV』(2017年10月放送)⁶、TBSテレビ『マツコの知らない世界』(2017年12月放送)⁷などがあげられる。

5. 調査発表会を始めとする現在の文化活動

マンホールカバーに関する調査報告は、林(1984)、垣下(1992)に見られるように、個人報告の範囲で行われることが多かった。デジタルカメラが普及する以前においては、写真そのもののコストが高く、マンホールカバーの写真を撮ることを趣味とする人がそもそも少なかったものと思われる。

2000年代後半にデジタルカメラやスマートフォンが普及すると、趣味人口が一気に增加了。また、2010年代になると、TwitterやFacebookに代表される

SNS の利用が広まり、情報や知識の共有と、同じ趣味を持つ人との交流が進んだ。その結果、マンホールカバーをテーマにした街歩きやカルチャースクールが開催されるようになった。

2011 年 11 月にはマンホールナイトというイベントが開催された。年々規模を大きくしながら現在まで 10 回の開催を行っており、調査結果の発表の場となっている。それだけではなく、マンホールナイト実行委員会編(2019)を出版するなど、共同作業による調査も進められている。

他に、業界団体である下水道広報プラットホームの主催により、2014 年 3 月にマンホールサミットが開催され、こちらも規模を大きくしながらこれまで 8 回の開催を行っている。マンホールサミットはより一般向けの話が中心となっており、研究発表の場というよりは、下水道事業の必要性を訴える啓蒙的な性質が強い。

下水道広報プラットホームは 2016 年 4 月から、下水道のデザインマンホールカバーをテーマとしたマンホールカード（図 6）を企画し、全国の自治体を通して配布を行っている。マンホールカードを発行するために新しいデザインマンホールカバーを作製するといった相乗効果も見られ、マンホールカバーに関する文化活動の一つの大きな原動力となっている。

6. おわりに

マンホールカバーに関する文化活動を取り巻く環境は、ここ 10 年で大きく変化しており、その研究内容は個人の趣味的調査から学術的な研究への過渡期にあるといえるだろう。

マスコミでそのブームが取り上げられる機会が増えているように、研究材料や情報量は学術的な研究が成り立つ領域に達しているものと思われるが、方法論が未熟であるために学術的な研究とはなっていない状況である。

また、これまでの調査や研究は、根本的に林(1984)で試みられた手法と内容をなぞる方法から脱することができずにいる。今後は、マンホールカバーの分類に統計的手法を用いるなど、これまでにない学術手法を導入することにより、より深い研究に着手していきたいと考えている。

【注】

- 1 一般には「マンホール」或いは「マンホールの蓋」などと表現されることが多い。マンホールとは、地下の空間及びそれを構成する壁面のことであり、路上から見えるのはその蓋である。しかし「マンホールの蓋」という表現は正しいものの、やや冗長な表現になることと、国際的な場でも通用するよう に、本稿では学術用語として「マンホールカバー」と表現している。



図 6：マンホールカード

- 2 光明電気鉄道のマンホールカバー（図4）は筆者の調査により設置者が判明し、2010に静岡県のローカル番組「しずおか〇ごとワイド」（静岡第一テレビ）に出演した際に取り上げたことで認知され、最終的に磐田市埋蔵文化財センターに保管されている。
- 3 2011年にTwitter上でやなぽん（アカウント名）によって指摘された。
<https://twitter.com/yanapong/status/144965343641739264>
- 4 筆者が協力・出演した番組。
- 5 筆者が協力・出演した番組。
- 6 筆者が協力・出演した番組。
- 7 筆者が協力・出演した番組。

【参考文献】

- 池上修, 池上和子(2014)『デザインマンホール100選』アットワークス.
- 池上修, 池上和子(2018)『町自慢、マンホール蓋700枚。』講談社
- 石井英俊(2015)『マンホール 意匠があらわす日本の文化と歴史』ミネルヴァ書房
- 伊藤哲男(1967)『マンホール鉄蓋』東京出版センター
- 垣下嘉徳(2005)『路上の芸術 マンホールの考察、およびその蓋の鑑賞』新風舎
- カラーマンホール研究会編(2015)『厳選! デザインマンホール大図鑑』グラフィック社
- 月刊下水道編集委員会編(1992)「特集/グラウンドマンホール(人孔鉄蓋)のすべて」『月刊下水道』VOL. 15 NO. 6 環境公害新聞社
- 月刊下水道編集委員会編(1998)「特集/進化する『人孔(マンホール)』」『月刊下水道』VOL. 21 NO. 8 環境新聞社
- 月刊下水道編集委員会編(2001)「特集/進化し続けるって素晴らしい—グラウンドマンホール、次なる10年に向けて—」『月刊下水道』VOL. 24 NO. 7 環境新聞社
- 月刊下水道編集委員会編(2017)「特集 ときめきのマンホール蓋」『月刊下水道』VOL. 40 NO. 2 環境新聞社
- 水道研究会編(1928)『上下水道設計図集』
- 水道産業新聞社編 建設省下水道部監修(1987)『マンホールの表情』
- 水道産業新聞社編 建設省下水道部監修(1989)『路上の紋章』
- 水道産業新聞社編 建設省下水道部監修(1992)『グラウンドマンホールデザイン250選』
- 水道産業新聞社編 建設省下水道部監修(1997)『日本のマンホール写真集』
- 大東京社編(1920)「東京市の地下には種々の埋設物あり」『明治神宮と大東京』
- 大東京社編(1921)「道路露面章略解」『大東京市民ノ常識』
- 東京市下水改良事務所編(1915)『東京市下水道詳細図』
- 東京市役所編(1929)『下水道設計標準図』
- 中島工学博士記念事業会編(1927)『日本水道史』

林丈二(1984)『マンホールのふた 日本篇』サイエンティスト社
マンホールナイト実行委員会編(2019)『マンホール趣味を知るためのキーワード』

G&U 技術研究センター編(2005)『マンホールの博物誌』ダイヤモンド社
G&U 技術研究センター編(2006)『技術広報誌 G&U』1 G&U 技術研究センター
G&U 技術研究センター編(2006)『技術広報誌 G&U』2 G&U 技術研究センター
G&U 技術研究センター編(2008)『技術広報誌 G&U』3 G&U 技術研究センター
G&U 技術研究センター編(2015)『技術広報誌 G&U』6 G&U 技術研究センター
G&U 技術研究センター編(2016)『技術広報誌 G&U』7 G&U 技術研究センター
メディアハウスムック編(2015)「下水道のミライ」『Pen+』CCC メディアハウス
GKP マエプロ(2017)『マンホールカード コレクション1』スマート出版
下水道広報プラットホーム(2018)『マンホールカード コレクション2』スマート出版

(2019年5月10日改稿受理)

立川言語文化研究会 会則

- 第一条 本会は「立川言語文化研究会」と称す。
- 第二条 立川言語文化研究会は立川日本語・日本語教育研究所主宰の研究会である。
- 第三条 本会は、ことばに関する研究・教育する人たちと連携を図り、研究発表だけでなく、意見交換、情報交換の場を提供するとともに言語文化の研究・教育の発展に寄与することを目的とする。言語文化研究には言語学、日本語教育学、文学、社会学など、言語表現に関わる研究分野を広く含む。
- 第四条 ことばの研究・教育に関心のある人ならば会員となれる。
- 第五条 本会の目的を達成するために、次の活動を行う。
1. 研究発表会（もしくは研究報告会）の開催。
ウェブ上の研究会は、メーリングリストを使用して行う。
 2. 年一回の研究誌『日本語文化の研究』発行。
 3. その他、講演会、親睦会など本会の目的を達成するために必要な事業。
 4. ホームページによる情報発信。
- 第六条 本会は下記の役員をおく。
1. 会長 一名
 2. 副会長 二名
 3. 会計監査 一名
- 第七条 役員は任期 2 カ年とする。ただし、重任を妨げない。
- 第八条 本会の経費は、寄付金、交付金その他の収入をもってこれにあてる。
- 第九条 本会の会費は無用であるが、『日本語文化の研究』に掲載が決まった場合には、掲載料として 10,000 円を必要とする。
- 第十条 本会の会計年度は毎年 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。
- 第十一条 事務局は立川日本語・日本語教育研究所内におく。
- 付記 この会則は 2017 年 5 月 30 日から実施する。

2017 年 11 月 4 日 一部改訂

『日本語文化の研究』投稿規定

1. 本誌は、年一回発行を基本とする。
2. 投稿は原則として会員に限る。
3. 原稿の内容は、言語学・言語教育・民俗学など、ことばに関連があるものに限る。
4. 原稿の採否は編集委員が審査し、決定する。また、審査段階で修正を依頼することがある。
5. 使用言語は日本語または英語とし、横書きとする。
6. 原稿は完全原稿とし、未発表論文（口頭発表を除く）に限る。
7. 原稿の長さは図・表を含め A4 判サイズで 10 枚を越えないことを基本とする。
8. 原稿の左右・上下の余白は以下に示した例に従うこととする。日本語の原稿は 40 字 × 40 行を基本とする。英語の原稿はダブルスペース、または 1.5 スペースで 40 行を基本とする。原稿の 1 ページ目は、タイトル、氏名、所属をこの順に記し、それに本文を続けることとする。頁ナンバーは、原稿の裏に鉛筆で記すこと。ワードによる電子媒体で投稿する場合は頁ナンバーの記載は不要。

原稿は隨時受け付けるが、次号（Vol. 3）の締め切りは 2020 年 3 月末日とする。

送付先（送信先）は立川言語文化研究会事務局まで。

日本語文化の研究 VOLUME 2

2019年5月17日発行

編集 立川言語文化研究会

発行 立川日本語・日本語教育研究所

〒190-0012 東京都立川市曙町3-4-20

立川言語文化研究会事務局

電話・FAX 042(848)5131

印刷 ぎょうせいデジタル株式会社

〒190-0012 東京都立川市曙町1-25-12

電話 042(540)5331

ISSN2433-2623

NIHONGOBUNKA NO KENKYU

(Studies in the Japanese Language Culture)

VOLUME 2

May 2019

CONTENTS

Articles

Shingo HAYANO : The Study on Japanese Language Education Using Comics(3)

—Ancient Literature Education for Primary School Children —

Yoshie MIYATA: A Research of Japanese Language Support in Tama Area (Tokyo

Prefecture) —The Situation of Higashiyamato City—

Yoko MATSUI: A Research of understanding school material toward foreigners

—Metalinguistic ability required for education—

Kohei SHIRAHAMA : A Study on the Socio-Cultural Elements of Manhole Cover in Japan

**TACHIKAWA Research Institute
for Japanese Language and Japanese Language Education**